

グングン上達コース3月号付録  
 原稿用紙5まいにちょうせん  
**最優秀作品発表!**  
 「あっちゃんの赤い自転車」  


「あーあれもぼくを買ってくれない。赤い自転車はため息をついて言いました。赤い自転車は自転車売り場にもう二年間ほどいるのです。その間にさびたりしてしまつて、今は中古車売り場にいるのです。するとおやおや、話し声が聞こえます。

「あやこ、あっちゃんのピンクの自転車のほうがかわいい……。」  
 「いや、赤のー!」  
 「でもぼろぼろ……。」  
 「いいつたらしいのー!」  
 赤い自転車はうれしくてペダルを少し回しました。キイキイという音がしましたが、自転車は気にしませんでした。(ぼくはついにあやこっていう人を買われるんだ!) お父さんは、ふまんぞくげにおさいふをとり出しました。

「わかった。この自転車をかうぞ。」  
 家に着くと、赤い自転車は油をさしてもらい、びっかびかにみがきあげてもらいました。

「私あっちゃん。これから、よろしくね。」

スキップしながらあっちゃんが言いました。  
 「あやこー 公園に行きますよ。」  
 「はい。」  
 今日、あっちゃんはごきげんです。あっちゃんは、茶いろがかつた黒のかみを二つにゆわえていて、まるで夜のように黒い目をしていきます。あっちゃんが自転車をにわらいかけたので、自転車はよけい赤くなりました。

「しゅっぱーっ。」  
 という間にもうペダルをこぎ始めていました。風が自転車の間をすりぬけました。(ヒヒヒ。くすぐつたいよ。) 自転車はわらいをこらえながら進みました。あっちゃんもつとつと速く走りました。(こんな気持ち、何年ぶりかな?) あまりの気持ちよさに自転車は目をとじました。公園に着いた時、自転車は公園の美しさにたいへんおどろきました。ピンクのほう石のようなさくらの花が遊び場にまい落ちています。公園の草の朝つゆが太陽の光をあびてきらきら光っていました。

帰る時間になると、二人はさびしげに公園を見回しました。家に着くと自転車はぐっすりとねむりました。

そしてある日のことです。あっちゃんは前の日こうふんしてねむれなかったの、ちよつとねむそうです。

「あやこ、今日は公園やめたほうがいいんじゃないの?」  
 「平気、フッフワアア。」  
 大あくびをしてからよたよたと自転車

のほうに走り出しました。びゅんびゅんと自転車とあっちゃんは走っていきました。自転車は急カーブの所が心配でした。(ペダルを、動かして。) あっちゃんは重たい足でペダルを動かそうとしましたが……。

「ガツシャーン」  
 と大きな音がしました。あっちゃんはわらかい草にぶじ着地しましたが、自転車は「バキンー!」  
 という音と共にばらばらにくずれていきました。自転車の目の前は暗くなりました……。

どのくらいたつたでしょう。目の前が急に明るくなりました。  
 話し声も聞こえます。  
 「すみませんが、この自転車は直りません。でもちがう物になりますから……。」  
 「では引きとってもらえますか。」  
 「はい。もちろんです。」  
 「ありがどうございませ……。」  
 また何も聞こえなくなりました。(ぼくは、今どこにいるのかな? あっちゃんはどうなつちやつたのかな?) 自転車のむねは不安でいっばいでした。(さっきの声はお父さんかな。じゃあ今は……) あっちゃんがいっしょにいないとわかると、悲しくなりました。(直りませんって言つたつて。それじゃあぼくはどうなつちやうのか……) 急に赤い自転車の意識は遠くなりました……。

それから一年後……  
 さくらの花がきれいに公園をかざりました。赤い自転車は今、昔あっちゃんと

みなさんのお手本とするために、漢字や送りがななどは必ず書いていただきます。学年は運動場出陣点のものです。

いっしょに行っていた公園の鉄ほうになりました。あっちゃんに会いたくて、さびしい毎日をおくっていました。

夏の日のことでした。見なれない女の子が公園に来ました。茶色がかつた黒のかみの毛を二つにゆわえています。鉄ほうは、言葉に表せないほどおどろきました。だってその女の子はあっちゃんだったのですから!! あっちゃんはさか上がりの練習を始めました。一回目はおなかが鉄ほうからはなれすぎてしまいました。二回目ほど中で手をはなしてしまいました。(がんばれあっちゃん!) と鉄ほうは心の中でおうえんしました。けつきよく、その日はさか上がりができるようにならなかつたけれど、あっちゃんと鉄ほうはわらっていました。あっちゃんは、なんだか前からその鉄ほうを知っていたような気がしました。



最優秀先生から

メッセージ

どう! 会話文、そして、自転車(鉄ほう)の心の声など、登場人物たちの気持ちをていねいにすくいとつた素敵な作品です。また、「夜のように黒い目」「ピンクのほう石のようなさくらの花」などの表現にも、せんざいな感性が感じられました。物語の構成も見事です。「二人」の絆を讀者に自然と感じさせる結末にも、主人公に中古車売り場へくすぶつていた自転車を設定したがゆえの説得力があり、さんのお話作りのセンスを感じました。